

「出題の意図」

選抜区分	2023年度（選抜区分：一般選抜前期日程） 法学部 法律学科及び政策科学科（科目名：小論文）
出題の意図 （評価のポイント）	<p>1 課題文選択の背景</p> <p>出典は、花房尚作『田舎はいやらしい——地域活性化は本当に必要か？——（光文社新書 1177）』（光文社、2022年1月）である。本書は、実際に過疎地域で暮らしている筆者が、「過疎地域には過疎地域の行動様式があり、都心には都心の行動様式がある」という視点から、現実に沿った形で過疎地域の在り方を考察することで、現行の過疎地域対策とは異なる選択肢を提示することを目指した書である。本問では、都心で暮らしていた者の視点から過疎地域を批判し、過疎地域で暮らしている者の視点から筆者自身を批判した第一部の最終章から出題した。</p> <p>課題文で筆者は、次のように議論を展開する。公園や運動場をつくるといった地域活性化事業は、効果が限定的である。マスメディア、為政者、知識文化人、官僚は、過疎地域を批判せず、既得権益を守っている。過疎地域の産業は補助金で支えられており、成果が出ているように見えても、実際は大幅赤字となっている。国の仕組み全体が、過疎地域の変革を不可能にしている。それならば、自然を動植物に返してあげたらどうか。人間が日本列島の津々浦々まで住む必要はないわけで、過疎地域への国家による支出は効果がなく、支出を減らすためには、過疎地域自体が消えてなくなることが望ましい。しかし、これを主張すれば各方面から袋叩きに遭うため、現状維持という名のゆるやかな後退こそが、叩かれずに済む唯一の着地点となる。過疎地域の人びとにとっての地域活性化は建前であり、本音では現状維持という名のゆるやかな後退を望んでいるのである。</p> <p>過疎地域の活性化というテーマは、多くの受験生が一度は考えたことがある論点であろう。しかしながら、単純に中学・高校の先生から地域活性化を考えようと言われたから考えたという受験生が多いと思われ、なぜ地域活性化が必要なのかについて考えたことのある受験生はほとんどいないと予想される。こうした状況下で、筆者の主張を正確に読み取った上で、地域活性化という問題について受験生に再考してもらうことが、出題の狙いである。</p> <p>2 受験生に何を望むか</p> <p>まず、上述した課題文の論旨を正確に理解し、過疎地域自体が消えてなくなることがベストであるという主張に至る過程について適切にまとめる力が求められる（読解力）。次に、これまで中学や高校で学んできた知識を総動員して、その主張に対する賛否について、論理的・説得的に自分の言葉で表現することが求められる（自説展開力）。</p>